

Mary Barton 試論

—衣服と女たち—

Mary Barton : Women and Clothing

香山 はるの

要 旨

エリザベス・ギaskellの多くの作品には衣服が重要なモチーフとして使われている。本稿ではギaskellの代表作の一つである *Mary Barton* に焦点を当て、特に女性キャラクターと衣服との関わりについて考察した。衣服—ことに他人の衣服への気遣いは、マンチェスターの貧しい労働者階級のコミュニティにおける温かい心のつながり、扶助の精神をしばしば示す。また、ヒロインメアリの成長も、彼女と衣服との関係から微妙に描かれている。「レディ」を夢見ていたメアリは、様々な試練を通して、自らの虚栄心を克服し、衣服や華やかな生活などいわゆる「外面」的な価値観への拘りから脱却し、真の人間性、愛に目覚めていく。「プライベート」な世界に生きる女たちが促す同胞愛、利他主義の精神は、苦しみにある者の心を和らげ、また、間接的にはあるが、ジョン・バートンとジョン・カーソンが体現するような貧しい「労働者」と裕福な「工場主」という二つの世界の隔絶に一条の救いの光を放っている。

エリザベス・ギaskell (Elizabeth Cleghorn Gaskell 1810-65) の小説には衣服についての印象的な描写が多い。たとえば *Cranford* (1858) に描かれる時代がかったヘルメットのような帽子や「古風な二輪馬車につけた幌に似た」カラッシュ ('calash') [110] と呼ばれる帽子の上に被る頭巾は、この町に住む老女たちの生き方、価値観を象徴するものである。また、*Ruth* (1853) の第13章には、純白の化粧着に身を包んだルース (Ruth Hilton) が美しい豊かな髪を召使のサリー (Sally) に切られる場面があるが、この白という色に読者は、男に捨てられ「墮ちた女」となったヒロインの汚れなき精神を見るのではないか。さらに、『〈衣装〉で読むイギリス小説—装いの変容』の中で青木剛氏も触れられているように、*North and South* (1858) の冒頭では、娘の嫁入り支度の一つである「インド製のショールとスカーフ」を、お祝いに訪れた客に誇らしげに見せる母親の姿が印象深く描かれている (188)。ここでは特に、きらびやかな

ショールとスカーフに代表される富裕階級とそういったものの保管や修繕の仕事を負う使用人たちとの対比が際立っている。このように、衣服と一言と言っても様々な意味がある。本稿では *Mary Barton* (1848) を中心に取り上げ⁽¹⁾、その中でも特に女性キャラクターに焦点を当て、衣服と女たちとの関係を探ってみたい。

Mary Barton において衣服はまず、生計の資として重要な役割を果たしている。工業都市マンチェスター (Manchester) を舞台にしたこの小説ではジョン・バートン (John Barton) のような労働者階級の男たちの多くは紡績工場に働いており、こうした貧しい職工と裕福な工場主との軋轢が大きなテーマとなっている。一方、労働者階級の女たちもしばしばそうした工場に働くが、そうでない場合にも「お針子」、「仕立て屋」といった仕事に就く者が多い。たとえばヒロインのメアリ・バートン (Mary Barton)、その友人のマーガレット・ジェニングズ (Margaret Jennings) はいずれもお針子であり、後で論じるメアリの叔母エスタ (Esther) やジェイン・ウィルソン (Jane Wilson) も、前者は家を出て恋人のもとに走るまで、後者は結婚前、機械に服をはさまれて大怪我をするまで工場に働いていたという。

第8章では毎日キャラコを織り続けている職工自身はたった一枚しかシャツを持っていないという事実をジョブ・リー (Job Lee) が訴えているが、衣服は「着る人」/「作る (或いは、着せる) 人」という社会的な分離、経済的な差異を露にしてしまう。たとえば、第6章で高熱で苦しむベン・ダavenport (Ben Davenport) の「入院許可証」を依頼するため、仕事仲間のジョージ・ウィルソン (George Wilson) が工場主のカーソン邸を訪れる場面があるが、やつれて顔色が悪く、髭も伸び放題でみすぼらしい身なりをしたウィルソンと、仕立ての良い上品な服を着て贅沢な朝食のテーブルについているカーソン父子との対比は痛々しいまでに露呈される。このような対比はまた第15章でジェム・ウィルソンとハリー・カーソン (Harry Carson) のメアリをめぐる対決の場面で繰り返されるが、ここでは単なる貧富の差に留まらず、自らの外見に優越感を抱くハリーの軽薄さや、ジェムの浅黒い手が触れたオーバーの白っぽい袖を「薄黒い汚れ」が残らないように手袋で拭き取る素振りをする (177) 彼の傲慢さが示唆されており、興味深い。

一方、この小説における女たちの場合、カーソン家の母親と娘たち—特にショールやコート、毛皮の襟巻きで身を固めた「頭も身体も動かさない」(202) 有閑マダムカーソン夫人—は語り手によって鋭く風刺されているものの、*Ruth* の第2章の舞踏会の場面で描かれているような「貧しいお針子」と「裕福で傲慢な貴婦人」との対比は直接にはあまり強調されていない。むしろギaskellは、ストライキや労働組合といった男性の「パブリック」な世界から離れた場に生きる労働者階級の女たちに焦点を当て、特に彼女たちと衣服の関わりを通して、苦しい生活の緩和やヒロインの行動がもたらす愛に基づく状況の打開を訴えたのである。

衣服は貧しい女たちの絆、相互扶助の精神をしばしば表すものとして描かれる。アリス・ウィ

ルソン (Alice Wilson) の清潔好きに示されるように、華やかな衣装を持たない労働者の間では「清潔」な身なりはその人の道徳的な価値の指標とも見なされるようである。また、ダヴンポート夫人が、中風の発作に見舞われ危篤状態に陥ったアリスのナイトキャップの洗濯やアイロンがけに細やかな気遣いを見せるように、他人の衣服への世話は、日々の生活にも事欠く彼女たちの温かな心配りや連帯意識をしばしば意味する。ジョブ・リーがロンドンへ亡き娘が残っていた孫娘を引き取りに行った時、全くの他人である女性が、赤ん坊だったマーガレットの汚れた衣服を優しく脱がせて死んだ息子の服を着させてくれたというエピソード、ダヴンポート夫人がロンドンに赴くジョン・バートンのためにプレゼントしてくれた新しいシャツ・カラーについての一節、マーガレットが、未亡人になったオグデン (Ogden) 夫人と子供たちのために仕立て代をもらわずに徹夜で喪服を縫おうとする場面など、心温まるエピソードが小説中にちりばめられ、特に小説の前半、ジョン・バートンの怒りと苦悩を中心とした一見暗い話の中にも救いの輝きを放っている。

主人公メアリもまた、こうしたコミュニティにおける助け合いの精神を徐々に身につけていく。第4章で読者は初めて会うマーガレットに自分を「印象づける」よう (31)、めかしこんだメアリの姿を目にする。この章ではアリスが奉公時代の思い出話をするが、自分のことで頭が一杯のメアリには他人の口に出さない気持ちまで汲み取ることができず、無遠慮な質問を重ね、アリスに「ああ、あなたは人の役に立つ喜びを知らないのよ」(32) と穏やかに指摘される。しかし、飢えや死と隣り合わせの生活の中で、このようなメアリの自己中心的な態度は改善されていく。そして、ダヴンポート夫人のために、自分の古い黒いガウンを喪服に仕立て直してプレゼントするまでに成長するのである。

こうした相互扶助の根底には、きちんとした衣服が、貧しい者たちが体面、自尊心を保って生きていくのを支えるささやかな力となっているという事情がある。実際、読者は葬式の日ダヴンポート夫人が、メアリのくれたござっぱりとした喪服に身を包んで「悲しみの最中とはいえ満足していた」(73) ことを知る。この意味では、食べ物に不自由するような労働者のコミュニティにあっても、「ドレス・コード」はかなり意識されていたと考えられる。第36章でも、バートンの訃報を聞いたウィルソン夫人は「古い連想 (おそらくは死と墓地、教会と日曜日) から一番上等で最近着ていない服を身につける必要があると思い、暖炉の前の小さな洋服掛けにかけて風当てする」のを楽しみにしていた (373) という。しかし、喪服の準備に忙しい母親の気持ちも知らず、帰宅した息子のジェムはバートンの臨終の様子について殆ど何も話さない。苛立ったウィルソン夫人は次のように叫び、重ねて「鳥の羽根の枕はずしたのか」などとあれこれ細かい点まで聞き出そうとする。

「ジェム」、彼女は言っていた。「臨終の場にいたのにそんなに話すことがないのなら、おまえは臨終に立ち会っていないようなものです。わたしはここで一日中一人でいました……でもジェムが帰ってきたらきっと話してくれるだろうって思っていたんです……ところが、こうしておまえは帰ってきたのに、母親に一言も話してくれない。もしおまえにそんなに言うことがないのなら、臨終に立ち会う必要はありません！」(372)

これは小説中の比較的数少ないユーモラスな場面の一つである。バートンの犯罪について沈黙を守ろうとするジェムと、死にゆく者に対する敬意として「儀礼」を重んじる母親との隔たりがコミカルな効果を生み出している。Coral Lansburyが言うように、*Mary Barton* ではこのように死すらある種の「コメディ」を生み出す。これは死という苦境にさえ打ちひしがれまいとする人々の決意であり、また彼らの持つ活力、回復力を示唆するものである (*Elizabeth Gaskell*, 20)。

さらに、メアリ自身の衣服との関わりを、彼女の野心と関連づけながらもう少し詳しく見ていきたい。先にも触れたが、小説の前半では、メアリは自分の美しさを際立たせて、他人に自分を印象づけようと服装には大変気を遣っている。そもそもメアリが、女中奉公よりもお針子として働くのを選んだのは、こうした虚栄心に依るところが大きい。つまり、女中は汚れた身なりであくせく働かなければならないが、お針子は激しい労働をすることもなく、いつも身なりに気をつけた服装をしていられるというのである。メアリは自分の美貌を早くから意識し、「レディ」になろうと早くから密かに決意していた。語り手はしばしば読者の反応をコントロールしつつ、こうした考えの浅はかさを仄めかしている。「メアリがいかに愚かなことを考えていたかをこのように明白に述べると、彼女は救いがたい娘だと思われるかもしれないが、十六歳では、どの階級どの境遇のものでも、愚かなことを考えるものである」(26)。実際若い娘がお針子として仕立て屋で働くこと自体、危険な誘惑を伴った。青木氏も述べているように、お針子は自然、客である裕福な階級と接することが多い(191)。こうした客とお針子の間にある「着る」「着せる」という関係そのものがそもそも「経済的、社会的な従属関係」にほかならず、そのため経済的にも社会的にも弱い立場にあるお針子が「紳士」との恋愛遊戯にしばしば巻き込まれたのは驚くにあたらない(197-99)。さらに仕立て屋の側としては、できるだけ可愛らしい容姿の娘を雇い、売り物を引き立てるいわば「モデル」として利用したいという目論見があったという(Flint, 16)。*Mary Barton* や *Ruth* におけるヒロインの迷いや過ちには、こうした背景があったのである。事実メアリがお金持ちでハンサムなハリーと初めて出会ったのも、彼女が勤めるシモンズ(Simmonds)の店であった。すぐに彼女はハリーに夢中になるが、厳密に言えばそれは、ハリー自身というよりも彼が身に付けているスマートな服が象徴するような、上流階級への憧れであった。「彼女は、現在の困窮をあれこれ考え、やがては針を動かしながら未来のことを思い描

き、生活を分かち合うことになる恋人のことよりも自分を待ち受けている安楽な生活、華やかさや虚栄心等に思いを巡らした」(116)。すなわち、第7章で語り手が説明しているように、メアリの頭の中は自分が乗りつける馬車やドレスの注文、美しい義姉妹と楽しむ乗馬など「アルナスカーのようなはかない夢」(81)で一杯だったのである。さらに彼女には自分よりはるかに身分の高い者選ばれたことへの誇りがあった。「一体どんな方が彼女を手にいれたいと思っているのかみんなに話したかった。」[129]

ここで、メアリの叔母、エスタのキャラクターについても触れておく必要がある。エスタの転落はメアリが一步間違えれば陥った道である。メアリはエスタに似て美人であり、事実この叔母からレディへの憧れを植え付けられる。ジョン・バートンの説明によれば、エスタは工場で稼いだお金を我が身を飾り立てる服や装身具につき込み、「ジェントルマン」との結婚を夢見て家を出た。やがて男に捨てられた彼女は貧困に苦しみ、幼い病気の子供のために街頭に立つことになる。第10章で義兄の前に姿を現したエスタの身なり一色あせた派手なドレスとショール、傘も無く雨の中を引きずっているモスリンの服、こけた頬に施したけばけばしい化粧—は彼女の若き日の夢の挫折を哀れに物語っている。ギaskellは *Ruth* でも、母親を早くに亡くした若い娘ルースが無防備に男性を信用して道を誤る話を書いたが、いずれの作品でも作者は、現世における実質的な救いは与えてはいないものの、「墮ちた女」たちの苦悶に強い同情を示しているように思われる。たとえば *Mary Barton* の第21章には、エスタが追放された「汚れなきエデン」(236)である故郷を訪れる場面が痛ましく描かれている。とりわけ、彼女が「街の女」の派手な衣装を脱ぎ捨て、「労働者の妻らしい」黒い衣服や黒い絹の帽子に着替えているのに注目したい。それは質屋で手に入れた擦り切れた古着ではあったが、エスタにとっては「二度と戻れない幸せな階級の女にふさわしい服装として、神々しく思われた」(236)。また、喪服を思わせるようなエスタの黒い服装は、病死した娘アニー (Annie) への追慕の念、さらには幸福だったかつての自分自身への哀悼の気持ちとも読めるかもしれない。

姪のメアリには自分と同じ過ちをさせまいと決意して行動を起こしたエスタであったが、メアリが「第二のエスタ」にならなかったのは、実際には彼女の働きによるものではなかった。たとえば、Lansburyが主張するように、メアリはエスタよりも概して冷静であり、「分別と良識」(*Elizabeth Gaskell: The Novel of Social Crisis*, 29)を備えていた。たとえばハリー・カーソンにのぼせ上がっていた時でさえ、メアリは最終的に自分が望むものを見失うことはなかった。それは愛というよりは安定した豊かな結婚生活であり、この意味では「結婚の見込みのない恋愛」など問題外であったのだ (*The Novel of Social Crisis*, 29)。メアリはジェムのプロポーズを断った直後に彼に対する本当の気持ちに気づくが、さらに、11章でハリーの本心—「結婚しなくたって十分幸福になれると思っていた」(137)—を確かめると、後者に対して感じていた多少のうしろめたさからも解放された。他方、「街の女」になったエスタはジェムとの再会の場面で

は依然として、自分を誘惑して捨てた男を庇う。「あの人のことを悪く言わないで！まだとっても愛してるの」(161)。ここに二人の現実認識の差が表れていると言えるのではないか。加えて、メアリにはエスタと異なり、真に自分を愛してくれる恋人ジェムがおり、また、いつも質素で地味な服を着て「健全な判断力」(43)を発揮するマーガレットという友人がいたのである。

一方、Rosemarie Bodenheimerの言うように、マーガレットがメア리를善に導く「グッド・エンジェル」だとすれば、仕事仲間のサリー・レッドビター (Sally Leadbitter) はさしずめメアリの足をすくう「バッド・エンジェル」ということになる(209)。第8章で語り手が認めているように、サリー自身は「ヒロイン」になれそうにない「不器量」で「卑俗な」娘で、面白半分にはメアリとハリーの仲を取り持とうとしていた。実際シモンズの店で働くお針子たちの大きな関心は専ら、こうした男女に関する噂話やファッション雑誌、浮ついた恋愛小説にあったという。メアリもあわやこうした安っぽい恋愛小説のヒロインにされる場所であったが⁽²⁾、前述の通り、真実に目覚めることで救われた。第25章で、サリーはけばけばしい色の日曜の晴れ着に身を包み、リヴァプールへ向おうというメア리를訪ね、得意げにアドバイスをする。「……裁判が終わったらね、メアリ、本当にあなたはなかなかのヒロインになるものね……どんな服でいくの？……あの青いメリノの服にきなさいよ。あれは確かに古いし肘のところがちょっと擦り切れているけれど……あの色はあなたによく似合うから……それから私の地模様のスカーフを貸してあげるわ。」「ああサリー！……こんな時に着るものことなんて考えられると思う？ ジェムにとって生きるか死ぬかが問題のときに？」(275-76)。サリーの派手な色合いの服装がこの場におけるメアリの心情にまるでそぐわないものであると同様、彼女の空虚で軽薄な言葉はメアリの神経を逆撫でするものでしかない。この場面は事実上、メアリのサリーとの精神的な決別を意味している。

父親のハリー・カーソン殺害という事実を胸に秘めたまま、愛するジェムを救出するため奮闘するメアリには、もはや自分の容貌を鼻にかけた、シンデレラ願望の強い少女の影は見られない。息子にかけられた殺人の嫌疑に慄くウィルソン夫人を慰め、メアリはジェムのアリバイの証人となるウィル (Will Wilson) を探すのに一人奔走する。荒々しい船乗りたちに混じって小船に乗り込み、寒さと恐怖で震えながらジョン・クロッパー号を追いかけるメアリの行動、32章の裁判の場面で、弁護士の意地の悪い質問にも耐え、恥じらいを忘れて自分の過ちとジェムへの愛情を告白するメアリの姿は、当時の「女性らしい行動」の規範を打ち破るものであったろう (Duthie, 131)。特に注目したいのは、メアリがたとえジェムの愛情という報いが得られなくても、全力を尽くして彼を守ろうという決意である。「彼女はすべてを自分の手でしたかった。彼の解放者、救出者になって、彼の命を救ってやりたかった。たとえ失ってしまった彼の愛を取り戻すことができないとしても」(290)。Kate Flintは、こうした自分を忘れたメアリの態度に「騎士道的な」要素を見、「犠牲者」と「解放者」という通常の男女の役割の逆転を指摘している (18)。

小説の後半でギaskellは、様々なキャラクターを使って、人間の内面の強さ、気高い精神の

価値を主張している。たとえば、リヴァプールでメアリのみすぼらしい服装からかえって彼女を信用し力となってくれる老水夫ベン・サタージス (Ben Sturgis) の「無骨な外見の内部に隠している愛情」(359) を、読者は彼の意地を張った言葉や態度の端々に見て取ることができる。また、法廷に現れた上品な紳士カーソン氏と粗野な身なりで伸び放題の髪をした「カイン」に似たジェムとを対比させる人々の態度を語り手は風刺している。「哀れなジェム！ 真っ黒な髪……までも彼の不利になるのだろうか？」(320) ギャスケルが批判したかったのは、多くの人が陥りがちな偏見、外見だけで他人を判断する傾向であった。「すべての人は固定観念として、毎日の糧を得るために苦勞しなければならぬ生真面目で厳しい顔つきの鋳物工より、ハンサムで聡明で陽気で裕福な青年の方が愛されていたに違いないと考えるからである」(323)。Flintら多くの批評家はこうした箇所にもトマス・カーライル (Thomas Carlyle) の『衣装哲学』(*Sartor Resartus*, 1838) の影響を見ている⁽³⁾(14)。たとえば、第16章には語り手の『衣装哲学』への直接の言及があるが、実際 *Sartor Resartus* における自己陶醉に浸る「ダンディ宗団」批判 (第3巻10章) などには、確かに人間の外面や体裁にしか価値を見出さないハリー・カーソンの姿を彷彿させるものがある。

さらに、こうしたことは法廷におけるメアリの具体的な外見描写がかなり抑えられていることとも無関係ではないだろう。語り手はグイード・レーニ (Guido Reni) の版画、「ベアトリス・チェンチ (Beatrice Cenci)」の表情を引き合いに出して「単なる身体上の美しさを超えた」(324) メアリの高貴な精神性を強調している。「話に聞くところでは……また、彼女の顔は子供の時に聞いた激しく物悲しい旋律の思い出のように頭から離れず、黙って悲しげに嘆願するように心に浮かび上がるとのことだった」(324)。このようなメアリの内面から湧き上がるような強い訴えが人々の心を動かし、また、彼女の努力によって出廷したウィルの証言が効を奏してジェムは救われる。裁判をめぐるメアリの活躍は彼女の成長、自立の頂点を示すものである。Bodenheimerの表現を借りるならば、メアリは行動を起こすことによって「真のヒロイン」となることができた。それは先に触れたサリー・レッドビターの考える安っぽい「ヒロイズム」とは根本的に質を異にするものであったのだ (208-9)。

19世紀、女性が従来の「プライベート」な世界を抜け出て、裁判など「パブリック」な場で声を発することの苦しみは、たとえばギャスケルと同時代の作家、ジョージ・エリオット (George Eliot, 1819-80) の *Felix Holt, the Radical* (1866) にも印象的に描かれている⁽⁴⁾。たとえば第46章では、ヒロインのエスタ・ライアン (Esther Lyon) が、暴動に巻き込まれ殺人の罪を問われたフィーリックスのために、心の動揺を制して立ち上がる姿が描かれている。「裁判はもうじき終わり、フィーリックスに判決が言い渡されるだろう、そしてこうしている間にも、彼のために弁護できることをなおざりにしているのではないか—こうした思いにエスタは耐えられなくなった。……私がそれをしなくては。出来る。時間はある。でもたっぷりあるという訳で

はない」(373)。結局、フィーリックスには「四年の禁固」という判決が下り、エスタは張り裂けんばかりの心痛を抑えて法廷を後にする。一方、メアリがエスタよりさらに激しい混乱に陥るのは、自分の父親がカーソンを殺害したという真実を知っているためである。彼女は狂ったようにジェムに向かって叫ぶと、失神して法廷から連れ出される。Lansburyの説明を待つまでもなく、メアリの襲うこうした「病的興奮」は、耐え難い現実との直面を回避したいという彼女の無意識の欲求から生じたものである (*The Novel of Social Crisis*, 46)。しかし、二人のヒロインのケースを比べてみると、恋人の救済という面から見れば、判決の結果により大きな影響を与えたのは、心により深い傷を負ったメアリの言葉であり、ウィルを探し出した彼女の行動だったのである。

メアリの活躍はジェムを救い、また無実のジェムの死を防いだという意味でバートンの良心をも救ったと言える (*The Novel of Social Crisis*, 23)。しかし、メアリは父親の苦悩を根本的な意味では理解しておらず、またジェムと彼女のカナダ移住は、彼らが英国での居場所を失ったことを示すという意味では「逃避的な」結末 (Flint, 19) という印象は否めない。こうした点は、しばしば指摘されてきたこの小説の構造上の欠点—ジョン・バートンを中心とするプロットとメアリを中心とするプロットの分断—に微妙に関わっている。小説の「序」で示唆されているように、最終的にギaskellはマンチェスターにおける労資の問題、二つの階級の隔絶に対して経済的、政治的な解決を示すことはできなかった。或いは、より正確に言うならば、作者は当初からそれを意図していなかったとも言える。ギaskellはマンチェスターの労働者階級の惨状を訴え、ジョン・バートンを初めとする職工たちが、富める経営者に憎しみを抱き、追い詰められていく様子を描いた。しかし、ギaskellは究極的には社会の問題をむしろ個人の問題に摩り替えている。たとえばそれは、これまで論じてきたようなヒロインの成長や活躍がもたらした救いであり、また、ジョン・カーソン (John Carson) が見せる心の変化だったのである。

第35章「我らの過ちを赦したまえ」('Forgive Us Our Trespasses') に描かれるバートンとカーソンの和解は感動的である。罪の意識に苛まれ衰弱したバートンは、カーソンにハリー殺害の罪を告白し、自分が不幸に陥れた老人の深い悲しみを知る。彼はその時、経営者と労働者という二つの世界を隔てる壁が音を立てて崩れ、自分とカーソンは子を亡くした悲しみを持つ父親同士だという真実に気づくのである。一方、カーソン側の態度の変化はやや間接的な形で引き起こされる。

衣服が様々な意味を持つこの小説の結末において、柔らかい純白のモスリンの服を着た少女と乱暴な「使い走りの少年」のエピソードは象徴的ですからある。通りを急ぐ少年に突き飛ばされ怪我をした少女は、美しい服に真っ赤な血のしみがつくのを見て、恐ろしくなって泣き出す。しかし、彼女の乳母が怒りに任せて少年を引きずっていった時、少女は泣くのをやめて仲直りのキスをしようと顔を差し出す。「あの子は何をしているのか自分でもわからなかったのよ、ねえ、そ

うでしょ？」(368) この言葉が耳に焼き付いたカーソン氏は、家に戻ると長らく開いたことのない聖書を開き、福音書を貪り読みながら涙を流したのである。Jane Spencer がこの小説における「子供」に注目し、その象徴的な意味を論じているのは興味深い。たとえば、第17章でハリー殺害に赴くバートンが母親を求めて泣きじゃくる幼児に出くわし、通りがかりの人にあれこれ聞きながら、その迷子を母親の元に連れて行くというエピソードがある。これから殺人を実行に移そうとする者がこういった温かい心遣いを見せるのは何とも皮肉であるが、見方を変えれば、このエピソードを通してギaskellはバートンに残されている善性を示唆しておきたかったのかもしれない。実際、Spencerはバートンの行為に、迷える羊を導く「よき羊飼い」(‘Good Shepherd’) という聖書的意味を見出している(35)。さらにSpencerによれば、同時に、苦しむ大人も神の前では「子供」のような存在である。すなわち、殺人という誤った方向に向うバートンも、また、ある意味では前述した「使い走りの少年」のように、これまで「誰が傷つこうと大して気にもかけずに乱暴に突き進んで」きた(Mary Barton, 368)「たたきあげ」の男、カーソンも⁽⁵⁾、それぞれ導きを必要とする「迷える子羊」なのである(35-6)。

バートンは、聖書の言葉(「我らが罪を犯したものを赦すごとく我らの罪を赦したまえ」[372])を唱えるカーソンの腕の中で静かに息を引き取る。哀れな罪人を救し、彼を殺人にまで至らしめた問題についてジョブと話し合ったカーソンは、これまでの工場主としての自分の人生を振り返り、雇用制度の改革に乗り出したという。これはある意味で楽観的な結びであり、既に指摘したように、小説が提示している社会問題の根本的な解消には至らない。しかしながら、ギaskellが一人一人の人間の意識の変革に願いを託したことは明らかであり、そのメッセージは今日の多くの読者の心をも打つものである。マンチェスターの貧しいコミュニティでは、人々がお互いを気遣い、助け合って生きている。とりわけギaskellは、メアリーやマーガレット、ウィルソン夫人やダavenport夫人など、「プライベート」な世界に生きる女たちを中心にして、同胞愛、利他主義という価値観を訴えているように思われる。それは工場の労資闘争に関わる男たちが属する「パブリック」な世界とは異なる視点から、苦しみや悲しみの多い生活の緩和に寄与するものである。ヒロインのメアリの成長、活躍は個人的な恋愛の成就ということに留まらず、間接的にはあるが、父親のバートンやカーソンの心に、階級を超えた人間愛に目覚めるきっかけをもたらした。

また、これまで論じてきたように、こうした女たちの生活、生き方を描く際、ギaskellはしばしば衣服というモチーフを効果的に使った。メアリの虚栄からの脱皮、成長は彼女と衣服とのかわりの中で微妙に表されていた。そしてそれは、*North and South*の結末(24章)で、エレガントなドレスを買い与えてくれる富裕な親類の申し出を押し切って、自分の服は自分で買うと言ったマーガレット・ヘイル(Margaret Hale)⁽⁶⁾、さらには*Cranford*第13章で、楽しみにしていた絹地を買うのを諦め、自分自身が破産の危機にあることも顧みずに金貨と小切手の交換を申

し出るミス・マティーことマチルダ・ジェンキンズ (Matilda Jenkyns) の姿勢にも連なっていくものであろう。Patsy Stoneman はマティーのキャラクターについて「19世紀の組織的な女性の小児化の犠牲」(‘the nineteenth century’s systematic infantilisation of women’[93]) と評したが、少なくとも上の場面においてこのコメントは当たらない。マティーの行動は、それまで厳しい姉に従って受身に生きてきた彼女の初めての自発的な決断であるのだから。

注

- (1) テキストには Elizabeth Gaskell, *Mary Barton* (London: Penguin, 1996) を使用した。なお、日本語訳は一部拙訳を除いては、松原恭子 / 林芳子訳『メアリ・バートン』(彩流社、1998年) による。
- (2) たとえば25章には、サリーがメアリの服装や態度について観察し、仕立て屋の仲間たちに詳しく報告するいわば「号外係」であったことが示唆されている。
- (3) 1840年代の小説におけるカーライルの影響については、Kathleen Tillotson, *Novels of the Eighteen-Forties* (Oxford: Clarendon, 1954), 150-156を参照されたい。
- (4) Robin Colbyは、“Some Appointed Work To Do”: *Women and Vocation in the Fiction of Elizabeth Gaskell*. の中で Benjamin Disraeli の *Sybil, of The Two Nations* (1845) と Eliot の *Felix Holt* を例に挙げて、「パブリック」な世界における女性の声の無効性を強調している (41)。
- (5) カーソンは労働者出身であったが、「改宗者ほど熱心な狂信家はいない」(172) という語り手の言葉にも暗示されているように、工場主としては労働者の苦境に共感を示さなかった。
- (6) この点については、佐藤和代氏も『「北と南」研究—衣装からみた階級とジェンダー—』の中で指摘されている (79)。

参考文献

- 青木 剛「ドレスメーカーから苦汁労働へ—お針子小説の変遷」『〈衣装〉で読むイギリス小説—装いの変容』久森和子 / 窪田憲子編著 ミネルヴァ書房、2004年。
- Bodenheimer, Rosemarie. “Private Grief and Public Acts in *Mary Barton*.” *Dickens Studies Annual* 9 (1981): 195-216.
- Carlyle, Thomas. *Sartor Resartus*. Oxford: Oxford UP, 2000.
- Colby, Robin B. “Some Appointed Work To Do”: *Women and Vocation in the Fiction of Elizabeth Gaskell*. Westport, Connecticut: Greenwood Press, 1995.
- Duthie, Enid. L. *The Themes of Elizabeth Gaskell*. London: Macmillan, 1980.
- Eliot, George. *Felix Holt, the Radical*. Oxford: Oxford UP, 1998.
- Flint, Kate. *Elizabeth Gaskell*. Plymouth: Northcote House, 1995.
- Gaskell, Elizabeth. *Cranford / Cousin Phillis*. London: Penguin, 1986.
- _____. *Mary Barton*. London: Penguin, 1996.
- Lansbury, Coral. *Elizabeth Gaskell*. Boston, Twayne Publishers, 1984.
- _____. *Elizabeth Gaskell: The Novel of Social Crisis*. London: Elk, 1975.
- 佐藤 和代『「北と南」研究—衣装からみた階級とジェンダー—』『ギヤスケル論集』第7号、日本ギヤスケル協会、1997年。
- Spencer, Jane. *Elizabeth Gaskell*. New York: St. Martin’s Press, 1993.
- Stonemen, Patsy. *Elizabeth Gaskell*. Brighton: Harvester, 1987.
- Tillotson, Kathleen. *Novels of the Eighteen-Forties*. Oxford: Clarendon, 1954.